

# 大学図書館における SPACE と PLACE

総合社会学部 総合社会学科 教授 堀田 泉

## 1 端末の向こうに

中央図書館との長いつきあいのなかで、改めて感じることもある。図書館の位置はもちろんのこと外観に限っていえば、エントランス、貸し出しカウンター、書庫、開架、閲覧机など、基本的なモノの配置はここ30年以上基本的にほとんど変化がない（入り口にバーコード・ゲートが設置されたぐらいか）。にもかかわらず、決定的に変化したところがひとつ。書目録、著者目録のボックスが数台の端末に置き換わったことだ。

この変化が質・量ともにいかに劇的であるかということは説明するまでもないだろう。勉強中に目を通したい論文や資料が出てきたときに、図書館に行き、目録で探す、なければ相互利用の書類を書いて係のところを持っていく、外部の所蔵の状態を調べてもらう、依頼を出す、文献やコピーが届く、連絡してもらう、取りに行くという一連の作業、しかも情報が不確かであればあるほど時間も手間も余計にかかることがらが指先でできてしまう。本学でも現在力を入れているリポジトリなどがグローバルに整備されていくなれば、目を通しておきたい論文のコピーなど地球の裏側に依頼を出さずとも瞬時にプリントアウトされるだろう。現にそうなりつつあり、この恩恵ははかりしれない。

図書館の端末の向こうに何があるか。量的に拡張することをやめない人間の知的な営みの「空間 space」（「宇宙」でもある）がある。そこにおいては文献や資料に関する情報は絶えず追加、更新され、堆積される。「調べれば（検索すれば）わかる」ことがらが格段に増える。細分化された記憶、分類、抽出能力

においては人間の頭脳は機械に劣るから、サイバー空間にはガセネタが多々あるにしても「知っている」だけのことでは人間の証明にはならなくなる。「何のために知るのか」「知ってどうするのか」ということがますます問われる時代になるだろう。

とともに、この「空間」は拡大する一方で、人為的に収縮もし、仕切り直され、絶えず再編成されていく。それをだれがどのように行うのか。私たちひとりひとりの能力や技術でもあるし、制度でもあるし、権力や財力でもある。ようするに種々雑多のエレメントが多元的に「空間」を支え、変化させるものとして作用しあっているのである。

この混沌を前にして、現在の中央図書館の端末はさしあたり OPAC に接続されているけれど、自宅や研究室からも、またスマートフォンからもアクセス可能であり、文献や資料を通じて「知ること」を目的とするならば、中央図書館を経由する必要も減じていく。目録をウェブ上に公開し、閲覧や貸し出しやコピーを受け付けている図書館や類似の施設が検索できれば、そこへ直結したほうが話が早いし、組織的かつ能率的に検索をかければ、図書館という「場所 place」に行つて端末を叩く必要もさらさらない、というわけだ。<sup>(註)</sup> そうなると文献や資料は他の種類のネット上の情報、たとえば商品やイベントのそれと全く同列の位置に置かれるようになる。改めてエントランスやカウンターのある「場所としての図書館」とは何か、何のためにあるのか、ということが問われるだろう。私の住んでいるところの県立図書館が移築増築にあたって「県立図書情報館」と名を改めたのはこの状況

を象徴している。

## 2 「空間」の覇権と「場所」の再現出

「空間」と「場所」との関連と相違に関する議論、論争は昨今、学問のどの領域においても盛んである。私の研究領域の社会学でいうと、とりわけ都市形成や景観の問題を、グローバル化と情報技術のめまぐるしい展開から理論的に理解しようとするなかでよく語られる。しかし議論は百出といったところで、共通の理解が形成されるにはほど遠い。両者はもちろん区別されるべきものではあるが、多くの意味で相互に重なり、相互規定的であるし、抽象的概念か具体的実体か、理論的あるいは実践的にどちらが先行しているのかといった本質的議論も成立しにくいし、そもそも不可能に近い。むしろ「場所」と「空間」の関係を使ってどのような状況を理解し、何を語るのかといった文脈で扱われることが多い。

近年、エドワード・ケーシーの手になる大著『場所の運命』が翻訳された（2008年、新曜社刊）が、これもその注目すべきひとつである。この本全体の主たる主張は、西欧の古代から現代に至るまでの哲学・科学史において「場所」がいかに認識されてきたかを丹念になぞることを通じ、西欧近代において「場所」が「空間」に圧倒されていったこと、そして今ふたたび「場所」が新たな意味を付されつつあるということにある。以下、二段組619頁にわたるこの本の内容を、思い切り要点だけ示そう。

「はじめに場所ありき」—ケーシーによれば、そもそも (in the first place) の存在としての「場所」はプラトンによって「何かが生まれ、作られ、発展させられる母胎」として認識され、アリストテレスは「空虚とは物体を奪われた場所」とした。つまりここでは「場所」が「創造」とともにあり、空虚よりも先に「場所」があるという「場所」の原初性が示されている。したがってここには「力」、あるいは作用したり抵抗したりする「力動

性」が「場所」に固有のものとしてある。しかし「場所」は占有されるほかに、そこに領域化ということが生じる。その際の領域とは、事物であるよりはむしろ「事物のための所在化」というものであり、領域は抵抗的な接触を欠いた、不可触なものとして認識される。これが「ヘレニズムおよび新プラトン主義の思想における空間の出現」であった。それは中世およびルネサンスの「無限空間」を経由してデカルト、ニュートン、ライプニッツ等の近代科学や哲学のはしりをなした人々の空間認識へと至るのであり、「空間が場所を圧倒していく過程」であったとケーシーはいう。これが決定的になるのが近代社会であった。どういうことかという、たとえばデカルトは「空間」を「延長するもの」とし、位置と距離によって計測するもの、すなわち計算可能性においてとらえた。こうなると「場所」の「力動性」は無際限に通過可能な媒体と見なされ、「空間」の無気力に道を譲り、そして「場所」は形式を等しくする空虚な「空間」の量的な部分になる。これをケーシーは「用地（サイト＝位置と点）化」と名づける。

その先はカント、ホワイトヘッド、フッサール、メルロ＝ポンティ、ハイデガーらの近現代哲学による「場所」の回復の論理の追究である。紙幅がないので省略するが、ここでは「場所」の再現出にとっての身体の果たす役割の重要性が指摘されている。「われわれが住みつく場所は、われわれが生きる身体によって知られるということである。さらにいえばわれわれは身体化されることなしに場所設定されえない」（メルロ＝ポンティへのケーシーのコメント）。

## 3 「用地」から「場所」へ

ただちにわかるように、これは哲学者なりの「近代化」あるいは「近代社会」への批判的メッセージである。だが、批判とはたんなる否定ではない。社会科学についていえば、政治学は「民主化」、経済学は「産業化」あるいは「資本主義化」、社会学は「都市化」とし

て「近代化」を捉えてきた。その過程は人間を封建的な桎梏から解放し、物的に豊かな生活を実現させたという否定のしようもないポジティブな面とともに、政治では権力のより合理的、包括的な支配や多数による少数者の圧迫、経済では環境の悪化や資源の枯渇、都市では単一で均質な居住環境、無秩序なスプロールというネガティブな面を生起させている。これを「空間と場所」に関する上のような哲学的な考察、さらには図書館における知との関連に重ね合わせてみると、無限空間で自在に跋扈する数値やカネに表現される抽象的な世界のなかで、個体としての人間が持つ生命や記憶や知識といった有限で具体的なものが絡み合い、せめぎ合っている状況が想起される。しかしこれは「空間か場所か」といった二元的、対立的な様相には解消されない。緊張をはらみつつも空間は場所を包含し、場所は空間を包含する。

だが、現在における傾向的な特徴は、かなりの事象がコンピュータ上のネットワークにおける位置と点で所在を表示され、収蔵されるというところにある。樹木や建造物といった有形のものや、それに付着した地霊とか怨念とか記憶といった無形のものごとが渾然一体としてあった「場所」が平坦に均されて、いったんのっぺらぼうな(番地をつけられた)「用地」となり、そこに新たなものが秩序づけられて累積的に建設されていく。土地の利用も図書館における文献や資料の利用についてもこのことは通底する。「空間が場所を圧倒していくこと」、これが図書館で今、急速に起きていることではないだろうか。

この視角をもって中央図書館の歴史と現在を見たときに、それは当初から「本館」という建造物の所番地という「用地」的性格を色濃く負わされていた面は否めない。そして図書増加にともない学内のあちこちに書物を安置するだけの「用地」としての書庫が散在しつつ増えていった。別言すれば他の建物を領域化していったのであり、この進行をわれわれは目撃してきた。その動きの果てが端末

であって、もちろん悪いことではないし IT 技術の進行にともなってますます「空間」を仕切りつつ加速化されていくだろう。

だがまた他方で、何とか図書館を「場所」にしようとするさまざまな試みが関係者によって絶え間なくなされてきたことも確かである。この「場所」へと向かう思いが大学を構成する各層にどれだけ根づいているか、その必要がどれだけ認識されているかが改めて吟味されなければならない。

その際に「場所」がそもそも創造と一体であったというケーシーの指摘は示唆的である。知識を丹念に拾い集め、再構成することを通じて個人的にして共同的な「知の創造」がなされる「場所」——というのが大学の図書館であろう。教職員、学生がそれぞれの立場で、また共同でそれを行うときに、「身体」というあまり省みられてこなかったことを再認識すべきであるというのもまた示唆的である。新鮮な着想は場所を選ばずに啓示されるが、思考がはばたき、形をなしていくには、精神も含めた身体感覚としなやかさが関わってくる。これを建造物のなかに力として吹き込むにはどうすればよいか。今後の中央図書館の課題だと思う。それは社会を形成していくことにも繋がっている。

津波で家を流され、仮設住宅に住むことを余儀なくされている人々にとって、居住の「空間」はさしあたり絶対に必要である。しかし心の住処として身体に生活が根づいていて、家族や近隣の人たちと共有してきた「場所」は流されて戻らない家のあったところにある。「空間」と「場所」は相互に不可欠のものとして響きあわねばならない。

(注) もちろんこれは極論であるが、関西でも指折りの蔵書数を誇るわが大学の図書館であっても、これだけ知識が専門化・細分化されると、学内では間に合わないことが多い。相互利用の窓口としての、本学のレファレンスの方々の卓越した能力には、アナログ時代

からずっと脱帽していることを感謝の念とともにここに書き添えておきたい。

